

## ピアジェーワロン論争の展開 (4)

—ピアジェ「知能の誕生;第2版への序」におけるワロンへの反論—

日下正一(福島大学) 加藤義信(愛知淑徳大学) 足立自朗(埼玉大学) 亀谷和史(日本福祉大学)

## 1. 第2版(1948)当時のピアジェ

「行為から思考へ」(1942)において展開されたワロンの批判に対して、ピアジェはその批判の主な対象となった「子どもにおける知能の誕生」(1936)の「第2版への序」(1948)の限られたスペースの中で反論を試みており、ピアジェがこの時期、ワロンの批判をかなり意識していたことがわかる。

第2版(1948)当時のピアジェは、まず、自分の3人の子どもの対象とした初期発達研究の成果を「知能の誕生」(1936)、「実在の構成」(1937)、「象徴の形成」(1946)の3部作にして発刊し終えた時期であり、また、彼独自の知能理論と発達段階論が完成を見た時期でもあった。さらに、1930年代から1940年代にかけては子どもの知覚の発達の研究と、後の発生的認識論研究の布石ともなる科学的諸概念の発生的研究が精力的に進められ、「数」(1941)、「物理量」(1941)、「時間観念」(1946)、「空間表象」(1948)などの著作がすでに公刊されていた時期でもあった。

「第2版への序」でのピアジェのワロンへの反論は、彼のこうした理論上の体系化、とりわけ発達段階論の完成を背景とし、一連の科学的概念(とくに空間表象)および知覚の発生的な実験的研究の成果に基づいておこなわれたものであった。

## 2. ワロンの批判に対するピアジェの反論

ピアジェは操作的思考の原型を感覚運動的知能に求め、それを土台として表象的思考、操作的思考へと発達していくとする、いわば単線型の発達図式を仮定していたのに対して、ワロンの場合には、場面の知能(感覚運動的な平面で発揮される知能)と推論的・言語的知能(さまざまなレベルの象徴に基づいて作用する知能;表象的思考と操作的思考)とは異なるルーツをもつもので、それらの間には発生関係はないとする、複線型の発達図式を考えていた。それゆえ、ワロンの批判は、ピアジェの発達図式における感覚運動的知能と表象的、操作的思考との連続性、つまり前者から後者への発達の移行に向けられたのであった。

こうした批判に対してピアジェは、次の2つの論点から反論をおこなっている。1つは、「空間の表象」の研究(1948)をもとに、赤ん坊はさまざまな活動の協調化によって対象の永続性のシエマ、2次元または

3次元へのはめ込みのシエマ、回転と移動のシエマ、重ね合わせのシエマなどを構成し、その後でようやく心的空間を体制化するようになる発生的な系列を指摘し、感覚運動的シエマを基盤として、それから表象的シエマへの発達の移行が生じるとしている。

もう1つは、知覚の研究をもとに、後の操作的思考の構造化において重要な役割を果たすことになる一連の知覚的シエマの構成が感覚運動的知能に基づいていること(たとえば、形や大きさの知覚的恒常性が対象の永続性を支えていること)を示すことによって、操作的思考の原型としての感覚運動的知能を強調するとともにこれらの間の発生的関係を示唆している。

こうしてピアジェは、表象的思考の誕生の基礎となっているのは、ワロンがというような言語的なものではなくて感覚運動的知能であることを強調した上で、ワロンは諸操作が漸次的に構造化されていく点を見逃し、その結果として感覚運動的知能と言語的知能とを対立させ、それらの間の非連続性を主張することになった、と逆に批判しているのである。

## 3. ピアジェの反論の限界

このようにピアジェは実験的研究の成果をもとに反論を試みたが、残念ながら自説の主張に終始しており、真の意味での反論とはなっていないように思われる。実際、ピアジェは彼の発生的説明が本当に成り立つかどうかを問題にしなければならないのに、それについてはまったく触れずに空間表象のシエマの発達を事例として、まさにワロンが批判する通りの発生的説明を繰り返しているにすぎない。また、感覚運動的知能から表象的思考への発達の移行において表象の発生が問題となり、「象徴の形成」(1945)ではそれを課題としていたはずなのに、その成果はここではほとんど引用されていないのである。もっとも、表象の発生の問題はピアジェに限らずワロンにとっても難解であり、両者とも心的なものの発生の基盤として運動的なものを重視し、模倣からの表象の発生を示唆してはいるが、必ずしも明快な説明になっているわけではない。そのことが発達の移行の問題をめぐるこの論争を噛み合わないものにしてしている一因なのかもしれない。そして、これをめぐる論争は、1950年前後に再び「国際社会学雑誌」において展開されることになるのである。